『江戸川大学紀要』第 31 号（2021 年 3 月）pp. 197-210

マグワイアの筋肉増強剤はなぜ容認されたのか

── 日本における 1998 年の大リーグ報道 ──

神　田　　洋*

要　約

1998 年の米大リーグを報じた日本のマスメディアには，筋肉増強剤使用を容認する記事が表出した。強打者マグワイアがシーズン中に筋肉増強剤の使用を告白し，年間本塁打記録を更新。薬物使用を巡り米国で起こった論争を受け，日本でも薬物批判だけでなく薬物容認論が出た。

米国の薬物容認論は批判への反論であり，日本でも同じ図式の容認記事が見られた。それらは Hoberman ら米国の先行研究が示した容認の理由に合致するか，あるいは理由を日本の状況に置き換えて解釈することができた。その一方で日本にしか見られない無造作な容認と言える記事も多く見られた。筋肉増強剤での肉体強化という逸脱行為そのものを楽しむ姿勢や，大リーグの権威への無批判な追随が，無造作な薬物容認を生んだ背景で特に目立ったものであった。いずれの背景も海外事情を報じる日本のジャーナリズム全般の問題につながるものであり，日本ジャーナリズム史の中での大リーグ薬物報道の位置づけは今後の課題となる。

キーワード：大リーグ，筋肉増強剤，ジャーナリズム，マグワイア

はじめに

1998 年，米国では大リーグ，カージナルスのマーク・マグワイア[1] のシーズン本塁打記録への挑戦が国民的関心事となった。マグワイアは筋肉増強剤アンドロステンジオンの服用をシーズン中に認めて議論を引き起こしたが，記録を更新して最終的にはヒーローとなった。

アンドロステンジオンは国際オリンピック委員会（IOC）や米プロフットボールリーグ（NFL）で禁じられていたが，当時の大リーグには薬物規定がなく，米国の法でも販売や使用が禁じられていなかった。米国のマスメディアには批判だけでなく，薬物使用を容認する論が表出した。

Hoberman[2] やウォディングトンとスミス[3] らは，研究者の立場からマグワイアの薬物使用がマスメディアに容認された原因を分析した。Assael と Keating[4] や Curtis[5] はジャーナリストとして 1998 年を含む「ステロイド時代」を総括。またスポーツ界全般の薬物報道に関しては，ベッテとシマンク[6] がスポーツジャーナリズムの限界を指摘した研究がある。拙稿「大リーグにおける薬物問題とスポーツジャーナリズム」[7] では，当時の報道の言説を分析したこれらの先行研究や回顧報道に，米国野球殿堂の投票権を持つ野球記者 11 人へのインタビューを加え，米国メディアの薬物容認の原因を考察した。

11 人は薬物疑惑の渦中にあるバリー・ボンズとロジャー・クレメンスに投票しない立場から転じ，投票に踏み切った記者である。記者たちの決断には，リーグと足並みをそろえて薬物使用選手の記録挑戦を応援した 1998 年の報道への反省が大きく影響していた。

米国の薬物容認報道を検討する中で気になっていたのは，当時の日本でどのような薬物報道がなされたかである。1998 年のマグワイアに関する

2020 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学マス・コミュニケーション学科教授　スポーツ史，スポーツジャーナリズム

日本の報道は，日本選手が関係していない出来事としては異例と言える大きな扱いを受けた。その中には米国で表出した薬物容認論の紹介や，日本のマスメディアによるマグワイア擁護の記事があった。日本のマスメディア，特に新聞は，筋肉増強剤の使用に一貫して批判的な立場を取っており，1998 年のマグワイアは極めて異例のケースである。にもかかわらず日本での薬物容認報道を分析した研究はこれまでない。

本稿は，米国の先行研究が示す薬物容認論表出の原因を，当時の日本の状況に照らし合わせ，日本の新聞，雑誌に表れた容認論の根拠を明らかにしようとするものである。また日本の薬物容認記事に，米国にない特殊なパターンが表れた背景についても考察する。

1995 年の野茂英雄の渡米を機に，大リーグは日本でも大衆の消費対象となった。日本の大リーグ報道は，大リーグを巡るビジネスの拡大と軌を一にして短期間で大きく展開した。1998 年はそういった劇的な変化のただ中にあり，薬物容認論を検討することは日本における大リーグの報道が確立する過程をたどることにもなる。

また海外報道全般の問題を考える上でも，大リーグ報道を取り上げる意義がある。運動面の記事で薬物批判を展開した新聞が，社説や一面のコラムでは薬物使用を容認した例があった。人々が気軽に言及するスポーツが題材だからこそ，無防備な本音が表れることがある。それゆえスポーツ記事はジャーナリズムの問題を分析するのに適している。大リーグ報道の問題点は，大リーグ記事に分かりやすい形で出た海外報道全般の問題でもある。

1. 分析の対象と方法

1-1 分析対象

日本の新聞（通信社電を含む）と雑誌に表出した薬物容認記事を対象とした。薬物使用の正当性を主張する（薬物禁止論への批判も含む）記事，批判や疑問を呈することなく薬物による競技力向上効果などに言及した記事を容認論とした。両論併記の記事は，基本的に容認論には含めない。

調査範囲はマグワイアの薬物使用が発覚した 1998 年 8 月から 1999 年 12 月 31 日までとした。マグワイアは 2 年連続で本塁打記録に迫って注目され，前年の薬物騒動に触れた記事が多く見られたため 1999 年を範囲に含めた。

朝日新聞，毎日新聞，読売新聞，産経新聞，日経新聞の 5 紙と共同通信はオンラインのデータベースで「マグワイア」をキーワードに検索し，計 2144 件のヒット（共同通信配信記事の重複あり，個人記録，スコアなどを含む）があった。そのうち 75 本が薬物使用に関する記事で，10 本が薬物容認と認められるものだった。

日刊スポーツ，スポーツニッポン，サンケイスポーツ，スポーツ報知の 4 紙は国立国会図書館，日本体育大学図書館所蔵のマイクロフィルムで大リーグ欄を閲覧した。共同電を除くと薬物に関する記事は 33 本で，8 本の容認記事が認められた。

雑誌は大宅壮一文庫のデータベースで「マグワイア」をキーワードにして検索。また二つの大リーグ専門誌は野球殿堂博物館図書室で閲覧した。薬物使用に関する記事は計 35 本あり，うち 10 本が容認記事と認められた。

マグワイアのアンドロステンジオン使用に関する記事計 143 本のうち，薬物使用を容認する論調が表れていたのは計 28 本認められた（表 1）。ただし残りの 115 本が薬物使用を明快に批判しているわけではない。薬物使用の事実を記すこと自体が，批判的なニュアンスを伴う暴露であり，容認に分類されない全ての記事が批判的文言を含むわけではない。

1998 年は反ドーピングの機運が高まっていた。1 月に水泳の世界選手権で中国の 4 選手が出場停

表 1　マグワイアの薬物記事（媒体種別）

	薬物記事	そのうち容認記事
新聞・通信社	75	10
スポーツ紙	33	8
雑　　誌	35	10
合　計	143	28

止処分となり，1994 年の広島アジア大会に続き，国家ぐるみのドーピングへの疑念が高まった[8]。また 1998 年 7 月には自転車ロードレースのツール・ド・フランスで大量の薬物規定違反が摘発[9]され，翌年の世界反ドーピング機関（ＷＡＤＡ）設立につながった。

1998 年の朝日新聞，毎日新聞，読売新聞のデータベースで，中国競泳陣とツール・ド・フランスの薬物問題の記事は計 61 本あり，そのうち薬物使用を容認する論調は皆無だった。マグワイア以外の事例で薬物使用の容認は認められず，マグワイアの薬物報道が当時の日本の新聞で極めて異例であることを示している。

1-2　分析方法

マグワイアのアンドロステンジオン使用を容認する 28 本の記事を，Ⅰ薬物批判への反論としての容認，Ⅱ既成事実として疑問呈さず容認，Ⅲ米国の容認論を肯定的に紹介の 3 パターンに分類し（表 2），日本の報道の特徴を分析する。

Ⅰは薬物使用への批判意見の存在を意識しながら，マグワイアのケースを擁護，容認する形をとる。米国で表出した各種の容認記事はいずれもこのパターンに分類される。ここでは米国の先行研究が挙げた薬物容認論表出の三つの主な原因を日本に当てはめ，米国との類似や相違について検討する。

Ⅱ，Ⅲは米国には見られなかったパターンである。Ⅱは薬物使用の正当性について議論することなく，使用が米国で道義的に受け入れられている前提でアンドロステンジオンに言及している。Ⅲは米国の球界関係者やスポーツジャーナリストの薬物容認論を，日本の筆者や編集者が疑問を差し挟むことなく紹介している。

表 2　マグワイアの薬物使用を容認する記事

記事タイプ	媒　体	番号	タイトル	掲載日
Ⅰ 批判を意識しながら容認	朝日新聞	①	米大リーグのマグワイアが今季 61 号の本塁打（天声人語）	98 年 9 月 9 日
	読売新聞	②	マグワイア選手の挑戦に拍手（社説）	98 年 9 月 10 日
	毎日新聞	③	マグワイア狂騒曲　興奮，最高潮に	98 年 9 月 5 日
	毎日新聞	④	マックとサミー　米大リーグファンは幸せだ（論説）	98 年 9 月 30 日
	産経新聞	⑤	マグワイア 52 号　3 年で 162 本，大リーグ新	98 年 8 月 24 日
	産経新聞	⑥	「脱薬物」の追い風　なぜかコミッショナーは静観	99 年 8 月 18 日
	共同通信	⑦	平均飛距離は 130 メートル	98 年 9 月 8 日
	共同通信	⑧	米大リーグに新たな超人伝説	98 年 9 月 8 日
	日刊スポーツ	⑨	マグワイア 52 号　3 年合計 162 発も単独 1 位	98 年 8 月 24 日
	日刊スポーツ	⑩	70　The Legend of Mark McGwire	98 年 9 月 29 日
	スポーツニッポン	⑪	マグワイア 52 号　残り 33 試合マリスへあと 9	98 年 8 月 24 日
	週刊大衆	⑫	大記録 62 号ボールに 300 万ドル	98 年 9 月 14 日号
	FOCUS	⑬	どん底からはい上がって偉業達成！	98 年 9 月 23 日号
	週刊ベースボール	⑭	マグワイアとソーサによる至高のホームランダービー，決着へ	98 年 10 月 12 日号
	Number	⑮	マーク・マグワイア　悟りの境地へ	99 年 5 月 6 日号
Ⅱ 既成事実として容認	日刊スポーツ	⑯	マグワイアの秘密（トリビア）	98 年 9 月 1 日
	日刊スポーツ	⑰（図 1）	マグワイアのすべて（写真への書き込み）	98 年 9 月 4 日
	日刊スポーツ	⑱	マーク・マグワイア（略歴）	98 年 9 月 9 日
	サンケイスポーツ	⑲（図 2）	マーク・マグワイア（イラスト式略歴）	98 年 9 月 9 日
	週刊文春	⑳	超人マグワイアに「肉体の秘密」あり！	98 年 9 月 17 日号
	週刊実話	㉑	柴田勲のダンディーベースボール	98 年 10 月 22 日号
	週刊ゼッケン	㉒	前田日明の異種格闘句（対談）	99 年 2 月 20 日号
Ⅲ 米国の容認論を紹介	共同通信	㉓	頭を働かせリポートする（インタビュー）	98 年 9 月 17 日
	共同通信	㉔	イチローは今の体形で十分	99 年 3 月 1 日
	スポーツ報知	㉕	「クスリ漬け疑惑」擁護	98 年 10 月 16 日
	週刊現代	㉖	マグワイアが 62 本目の本塁打を打つ日	98 年 9 月 12 日号
	NEWSWEEK 日本版	㉗	連載コーナー「SOCIETY」	98 年 9 月 16 日号
	週刊プレイボーイ	㉘	伝説の男マーク・マグワイアは今年もスゲェぞ！	99 年 3 月 30 日号

2. 分析の結果

2-1 批判を受けての薬物擁護

表２のＩで示された記事は，批判意見の存在を意識しながらの薬物容認論である。米国の容認論は，ＡＰ通信によるマグワイアの薬物使用の暴露[10]で始まった論争の結果出てきたものであり，基本的に批判に対する意見表明である。ここでは米国に似た図式の日本の薬物容認報道を分析対象とする。

米国の先行研究で示された薬物容認の三つの主な原因[11]に，日本の記事を照らし合わせ共通性と相違点を明らかにする。米国で示された原因のうち，1）アンドロステンジオンの合法性，2）ジャーナリストの薬物知識の欠如，は日本にもほぼ当てはまる。3）スポーツジャーナリズムの構造的欠陥については，日本の状況に合わせた再解釈が必要となる。なお１本の容認記事に表れている根拠は必ずしも一つでなく，複数の要因が作用したものもある。

(1) アンドロステンジオンの“合法性”

アンドロステンジオンが大リーグの禁止薬物でないことは，米国でも日本でも薬物容認記事の最大の根拠となっている。表２の週刊ベースボール（⑭）が「増強剤使用は合法であり，記録更新に疑問を呈するのはまさに筋違い」としているのが合法性を根拠とする容認の典型的な例である。

1998 年の７月に陸上男子砲丸投げのアトランタ五輪金メダリスト，ランディ・バーンズがアンドロステンジオンの使用で出場停止処分[12]を受けた。しかしその約１カ月後にマグワイアが同じ薬物を使用していることが発覚した際は，大リーグのコミッショナーと選手会が声明[13]を発表し，薬物使用を擁護した。

ベッテとシマンクはドーピングの本質的な定義は困難で，禁止薬物や禁止行為の一覧を示す列挙的定義に頼るしかない[14]と指摘。ミサはドーピングか否かの境界線は「恣意的に定められ，常に変化し続ける」と主張[15]している。彼らの言を借りるならドーピングとは結局，競技団体や大会本部がその時点でドーピングと認定したものであり，1998 年の大リーグにドーピングという違反行為は存在しなかったことになる。Hoberman はスポーツ・イラストレーテッド誌を引用[16]し，大リーグ機構がアンドロステンジオンを禁じていない以上，大リーグ機構以上の規範をマグワイアに求めるのは筋違いだとする容認論を紹介した。規則という観点からマグワイアを合理的に批判することは困難で，日本でも容認報道が出たのは必然であった。

(2) 薬物知識の欠如

Curtis[17]は薬物の専門家が「理系でない」野球記者たちの意識の低さを嘆く言葉を引用し，ウエートトレーニングが野球の役に立たないなどの通説が流布していた当時の状況を説明している。

日本でも薬物への認識が同程度であったことは，多くの記事が示している。朝日新聞のコラム「天声人語」（①）は「薬物の使用問題もあったが」と前置きして「『野球は九九・九％が心理戦だ』と語る。それを乗り越えての大記録には，やはり『敬礼！』である」と記録達成を称える。だが 99.9％が心理戦だと話す選手が筋力トレーニングで腕回り 50 センチの体をつくり上げた理由は説明していない。

読売新聞の社説（②）は「本塁打は筋肉だけのたまものではない」。共同通信（⑧）は大型記事「表層深層」で「三年連続 50 号の実績と安定感を考えれば薬物の力という表現は適切ではない」としている。ともに科学的根拠なく，薬物を摂取したからといって本塁打を打てるわけでない，という論を展開している。本塁打を打てる選手が薬物を使ってどれだけ成績を伸ばせるかという検証はされていない。

(3) スポーツジャーナリズムの構造的欠陥

ベッテとシマンクはスポーツ記者を「お抱えスポークスマン」と称した[18]。取材証を発行する競技団体への忖度や，関係の深い取材対象への同調がジャーナリズムを成立させず，問題を暴露し

た記者が，他の記者から攻撃されることなどを指摘した。マグワイアの場合でいうならセントルイス・ポストディスパッチ紙は地元紙であり，スポーツジャーナリズムの構造的欠陥を示す典型的な例となっていることは，Curtis が指摘している。マグワイアの薬物使用を暴露したＡＰ通信の記者は，選手や球団からだけでなく，実際に他の記者からも攻撃を受けた。

当時の日本の報道は記事の多くを通信社電や米紙の転電に頼っており，上述したような取材対象との関係はなかった。にもかかわらず日本でもマグワイア側に立って薬物問題を報じた記事はあった。日刊スポーツ（⑨）は薬物報道について「気持ちのよいものではなかった」「結果を出すことで雑音を封印した」と，マグワイア側の視点で書いている。Number（⑮）のように「理不尽と言えば，彼が使用する筋肉増強剤アンドロステンジオンについても未だに問題視する声が絶えない」と薬物批判を「理不尽」とする記事もある。

ここで参考となるのは，クラズニック（ESPN.com）が述べた「みんな歓喜に包まれていた。チアリーダーのような当時の原稿を読むとちょっと気持ち悪くなる」[19] という米国を覆った国民的祝祭のような空気である。薬物使用が発覚した直後に地元紙だけでなく，ボストンやフォートワースの新聞が強い調子でＡＰ通信を批判し，マグワイアを擁護[20] した。このことはマグワイアを日常的に取材していなかった報道機関にまで同調を迫る力が働いていたことを示している。ＡＰ通信は1998 年の年間 10 大ニュースで，2 位にマグワイアの本塁打記録更新を挙げている[21]。米英軍によるイラク攻撃を上回り，クリントン大統領の弾劾問題に次ぐ扱いであり，米スポーツ史上屈指のニュースだったことが分かる。全米がマグワイアの“地元”と化していたとも言える。

日本の報道規模が，米国に準じるものであったならば，日本もクラズニックが経験した「歓喜」の中にあったということはできるだろう。

読売新聞の「98 読者が選んだ『海外』10 大ニュース」は 1 位に「大リーグ本塁打記録」を選んだ[22]。スポーツが 1 位となるのは，同企画 10 年目で初めてだった。記録が達成された 9 月，朝日新聞と毎日新聞は，夕刊を含め 7 日から 3 日間続けてマグワイアを 1 面に掲載している。読売新聞は 8 日付と 9 日付の夕刊の 1 面で，本塁打記録のニュースとともにサイド記事を同じ 1 面に掲載するトップ級の扱いをしている。

9 月 10 日付のスポーツニッポン[23] は放送各局がマグワイアの記録達成に対応した様子を伝えている。新記録が出た日本時間 9 日のカブス戦を衛星第 1 放送で生中継したＮＨＫは，NHK 総合の「ニュース 7」のトップで記録達成を報道し，約 10 分間を関連ニュースに割いた。衛星第 1 は 11 日夜に 3 時間を超える関連番組を流し，フジテレビは 9 日午後 5 時から 1 時間の緊急特番を放送。ラジオではニッポン放送が，9 日午前 8 時半からのレギュラー番組で，マグワイアの打席のたびに中継を挿入した。衛星第 1 放送は 9 月にマグワイアの出場試合を 14 試合放送した[24]。

サッカーのワールドカップや五輪のような国際大会でない一国のプロリーグで，しかも日本選手が関係していない事例をこれだけ大規模に報道した例はない。日本のマグワイア報道もクラズニックの言う「歓喜」の中にあり，それが米国で広く見られた同調記事を生む土壌となったことは推測できる。

2-2　無造作な薬物容認

前項まで米国の先行研究で示された米国の薬物容認の理由を日本に当てはめ，検討してきた。取り上げた日本の記事は，いずれも何らかの形で薬物使用の正当性を訴えたものであり，米国の記事に類似性が見られた。本項で対象とするのは（表 2）のⅡとⅢの記事であり，特徴は日本の報道機関が薬物使用に対して独自の意見を表明することなく，無造作に容認していることである。

(1)　既成事実として容認

Ⅱは反対意見の存在を意識することなく，薬物使用を容認している。米国の記事は，筋肉増強剤の使用が社会的に批判されるという前提で，あえて擁護しており，スタンスが全く違う。Ⅱは是非

図１　（表１の⑰）
背中に「〈筋肉増強剤〉アンドロステンジオン」の記述

図２　（表２の⑲）
バット左に「ムキムキマン　筋肉増強剤『アンドロステンジオン』使用」の記述

を検証することなく，当たり前のこととして薬物使用を受け入れているのである。米国では見られなかったパターンの報道である。

日刊スポーツ（⑰＝図１）は１面の写真への書き込みで，マグワイアの後ろ姿に身長，体重などを記している。その中に「〈筋肉増強剤〉アンドロステンジオン」という項目があり，線でマグワイアの背中へとつながっている。記事本文は活躍をたたえるのみで，薬物に一切言及していない。つまりアンドロステンジオンの使用は選手の一特徴として記載されているにすぎない。

サンケイスポーツ（⑲＝図２）はイラスト式の略歴で「ムキムキマン　筋肉増強剤『アンドロステンジオン』使用」と記している。メーン記事に薬物への言及はなく，偉業を祝福する米国の様子を伝えている。イラストはユーモラスだが，記事は好意的で薬物使用を揶揄しているわけではない。⑰，⑲ともにネガティブな意図がなく，アンドロステンジオンの使用を既知の「豆知識」として扱っていることが記事を読めば分かる。

このほかにも日刊スポーツの⑯，⑱など偉業を達成時のメーン記事に添えられた略歴には，アンドロステンジオンに関する記述が多く見られ，いずれも否定的な記述はなく，社会問題化したことへの言及もない。例えば⑯は本塁打量産の四つの理由を挙げ，３番目の「筋力アップ」の項目でアンドロステンジオンの服用について書いている。また⑱は略歴に「◇筋肉増強剤」という項目を設け「大リーグでは合法とされている筋肉増強剤のアンドロステンジオンを服用」と記している。

週刊ゼッケン（㉒）は，格闘家の前田日明とプロ野球巨人の清原和博の対談である。清原が「マグワイアなんかがステロイド系の薬を使ったりしているじゃないですか。ああいうのはどうなんですか」と問い掛け，前田は「ケガが多くなる」などと答えている。公的な場でアスリートが筋肉増強剤の効果について話し，マスメディアが無造作に掲載している。記事の掲載には，球団広報の許可が必要だったと考えられる。清原の発言は一般的とまでは言えなくとも，極端に球界の常識から

逸脱したものではなかったのだろう。

週刊実話（㉑）の野球評論家，柴田勲による分析は薬物使用の是非に言及せず「筋肉増強剤アンドロステンジオンを服用し，併せてウエートトレーニングを徹底的に行った」と強靭な肉体を生かす打撃フォームの解説として取り上げているにすぎない。

週刊文春（⑳）では，医療ジャーナリストの富家孝がアンドロステンジオンについて「睾丸が小さくなるなどの副作用もありますが，医師の指示に従えば問題ない。インパクトの際の瞬発力をつける効果があります」と説明している。専門家として薬物使用の是非を問うのでなく，薬物の特徴や効果について語っている。

いずれの記事もマグワイアの活躍を肯定的に伝えており，薬物容認の姿勢が表れているのは確かである。

⑵　米国の容認論を無批判に紹介

Ⅲは，米国の筋肉増強剤容認論を無批判に紹介している記事である。多くの記事が，米国人が日本メディアのインタビューに答え，薬物使用が本場の常識であると“啓蒙”するような作りとなっている。

1）主張を述べる人物が日本の報道機関の取材を直接受けているか，日本の新聞，雑誌に寄稿している，2）容認の主張に日本の筆者や編集者が批判や考察を加えていない，という条件を満たしているものを分類した。米国人だけでなく，時には米球界で活動する日本人も容認論を主張する人物として取り上げられている。

著名なコラムニストであるミッチ・アルボムは，共同通信のインタビュー（表1－㉓）でマグワイアの薬物使用が，なぜ大きなニュースになったのか分からないと述べている。「大リーグで禁止されていない」「法律を犯していない」などと使用を擁護する。

マリナーズのキャンプに参加したオリックス時代のイチローについて報じた共同通信の記事（㉔）では，マリナーズのグリフィン・ヘッドトレーナーが，イチローに筋肉増強剤の使用を勧めないとしながら「メジャーは，どの薬も禁止していない。個人の意思で使いたいなら正しい知識を与え，使うなという権利はない」と大リーグの現状を解説し，「マグワイアも，ハードな練習を常にしてこそ薬の効果が出ている。ずるいという認識はどこにもない」と述べている。現役の球団スタッフでコンディショニングの専門家による筋肉増強剤の容認に，記事は疑問を差し挟んでいない。

スポーツ報知（㉕）はマグワイアの練習を補助した経験のある今任靖之について伝えている。今任は日本人であるが，大リーグ側の人間として「筋肉増強剤を使ったといっても，あのウエートトレーニングはすごかったから」と語り，薬物使用が不当でないと主張する。

週刊現代（㉖）にはＵＳＡトゥデー紙のデスクが寄稿し，マグワイアが「強烈な『力』の信仰者である」と薬物使用の理由を説明するが，批判的な視点はない。NEWSWEEK 日本版（㉗）は米国人記者２人によって書かれたもので，筋肉増強剤と競技力向上につながらない酒とを同列に論じ，大酒飲みのベーブ・ルースも非難されることはなかったなどと主張している。週刊プレイボーイ（㉘）は，カージナルスの地元セントルイスの記者で，薬物使用を擁護するバーニー・ミクラスを取材している。

3. 容認論生んだ社会的背景

Hoberman らは，2－1の⑴～⑶で述べたように記事を分析してその言説に表れた問題を指摘した。またテキストの検証とは別に，薬物容認論を生む土壌となった社会的背景を挙げ，その影響を論じた。ほぼ全ての研究者が挙げているのが1994年の大リーグのストライキであり，Hoberman が強調したのはバイアグラを代表とする「パフォーマンス向上」薬の一般社会での受容である。それら米国の背景が当時の日本にどのように当てはまるのか，また直接の影響はあったのかを検討しなければならない。また日本に特徴的なⅡ，Ⅲのタイプの容認論を生んだ主要な背景につ

いても述べる必要がある。

3-1　米国の背景の日本への影響

(1)　1994年のストライキの影響

Assael と Keating をはじめとする多くの報道関係者が薬物容認の原因として1994年のストライキによる損失の影響[25]を挙げた。大リーグ選手会は1994年8月12日，年俸総額の上限を定めるサラリーキャップ制の導入などに反対してストライキを決行。ワールドシリーズが中止となり，ストライキは翌シーズンにかけて232日間続いた。

試合を失っただけでなく，再開後の観客減少など多大な損失を被った大リーグ機構は1997年3月にようやく新労使協定を結び，1998年7月にはコミッショナー代行だったバド・セリグがコミッショナーに就任した。その直後にマグワイアのアンドロステンジオン使用が発覚したのであった。

ストライキの期間は，報道するべき試合を失ったマスメディアにとっても苦難の時期だった。ストライキの記憶を引きずるマスメディアには，球界を混乱に後戻りさせまいとする力が働き，大部分の薬物批判派ですら最終的にはマグワイアを国民的英雄としてたたえた。本塁打記録挑戦を前面に打ち立てて野球復興を図るコミッショナーの筋書きに，報道機関が乗った[26]形である。

1995年の野茂渡米で本格的に始まった日本の大リーグ報道は，1994年のストライキの影響を受けていない。しかし空白期間から本塁打記録の熱狂へと，短期間で両極を経験し，後戻りできなかったという米国の状況に通じるものがある。ゼロから大規模報道への短期間での移行である。

野茂は1995年2月にドジャースとマイナー契約を結んだ。1994年から続くストライキ期間中で，その前に大リーグがフルシーズン実施されたのは1993年になる。野茂渡米前の大リーグは日本でどのような規模で伝えられていたのか。ここでは一つの目安として日刊スポーツの1面を取り上げ，野茂渡米前の1993，1994年と渡米した1995年，本塁打記録に沸いた1998年を比較してみる。宅配で大半の部数が固まっている一般紙と違い，スポーツ新聞は1面トップが売り上げに直結する。読者が求めるトピックについてスポーツ新聞がどう考えていたかは，世の中の関心をある程度忠実に反映していると考えてもよい。

1993年に大リーグ関連の1面は2度ある。9月6日付でヤンキースの隻腕投手アボットのノーヒットノーラン，10月11日付ではアリゾナ教育リーグで好投したマリナーズ傘下マイナー選手のマック鈴木について報じている。1面掲載回数が年間2度（厳密に言えば1度はマイナーリーグの話題）というのは，大規模な大リーグ報道がないと言っていい。

翌1994年は1面が10度ある。マックス鈴木が大リーグのキャンプに参加したためである。オープン戦期間を中心に3月19日付までで8度。他は9月にエンゼルスとマイナー契約した日本選手の記事があり，12月22日付で野茂の大リーグ挑戦表明を報じている。鈴木は結局大リーグに昇格できず，4月以降に1面を飾ることはなかった。しかし鈴木の登場で1面の回数が前年の2度から10度になったことは，大リーグが潜在的な人気商品として認識されており，日本人さえ絡めば主要なコンテンツとなり得ることを示している。

1995年は，野茂の移籍先を予想する記事が1月に3度1面を飾り，オールスター戦に先発登板した7月には12度，8月には6度などシーズン後半には1面掲載回数が登板数を超えた。結局大リーグ関連の1面は年間37度だった。うち33度で野茂が取り上げられている。1面にならない日も大リーグの記事はほぼ毎日掲載されており，1995年を境に大リーグはスポーツ紙に安定して記事を供給するジャンルとして確立していく。

マグワイアの本塁打記録達成があった1998年は，サッカー日本代表が初のワールドカップとなるフランス大会に出場した。サッカーは6月に27度1面を飾るなど圧倒的な1面掲載率だった。またシーズン後半はプロ野球で38年ぶりの日本一となった横浜ベイスターズが連日1面となった。それらの影響か，大リーグの1面は12度と少ない。特筆すべきは，そのうち6度がマグワイ

アであることだ。

6度はいずれも記録を達成した9月だが，全てが節目の本塁打を伝えているわけではない。「マグワイア爆破予告」「63号マグワイアに金よこせ!!」[27] などプレーと関係ない記事が1面に来ている日もある。それだけ関心事であり，スポーツ新聞社が販売部数を増やすために「マグワイア」を見出しにしなければならなかったことが分かる。見出しによって駅売りの新聞が売れるというのは，1面に載せる対象が商品として消費されるということである。1998年に大リーグでマグワイアが最も多く1面を飾ったことは，野茂の渡米から4シーズン目を迎え，日本選手以外も消費の対象になったことを示している。

商品価値という観点で見るなら，大リーガーのテレビコマーシャル出演は見逃せない。ドジャースのトミー・ラソーダ監督は，1995年のシーズン中に早くも野茂とともに缶コーヒーのテレビコマーシャル[28] に出演。野茂の球を受けた捕手で主砲のマイク・ピアザは単独で建設機械，下着，スポーツ用品のコマーシャル[29] に出演した。また1996年の日米野球は野茂の“凱旋試合”として脚光を浴びた。来日した米国の国民的ヒーロー，カル・リプケンは日本でも引っ張りだことなり，保険会社のコマーシャル[30] に出演するなどした。

1998年はシーズン後に日米野球があり，マグワイアが来日するかが注目されていた（結果的に本塁打王を争ったソーサのみが来日）。スポーツ紙はたびたび来日への期待を記事にし，シーズン本塁打記録の更新の際にはプロ野球の川島広守コミッショナーが「今秋の日米野球にぜひ来日し，その豪快なホームランを日本のファンにも披露していただけるよう期待しています」と談話[31] を発表した。日米野球にマグワイアが来るか否かは，主催者であった日本野球機構にとって一大事だったことを示している。

読売新聞社は日本野球機構とともに日米野球を主催した。社としてマグワイア招聘による日米野球の商業的成功を目指すなら，薬物使用の追及に消極的になることは避けられない。日米野球のメンバー発表は10月1日だった。例えばマグワイアの薬物問題を報じた9月2日付朝刊の記事[32] は見出しに「筋肉増強剤」という言葉を1度使っているが，本文では一貫してアンドロステンジオンを「栄養物質」と表記している。しかし日米野球終了後の12月に総合面（3面）に掲載されたドーピング特集[33] では，アンドロステンジオン（記事はアンドロステネジオンと表記）を「筋肉増強効果のある薬」と記しており，豊富な取材を基にした当時の新聞では屈指の内容になっている。日米野球というくびきから逃れ，薬物問題を追及できたのだろう。

日本はストライキの影響とは無縁だったが，上記のように1994年以前にゼロに等しかった報道が一気に膨れ上がり，1998年に大リーグ史上屈指のニュースに巡り合った図式は，1994年のストライキから商業的な復興を果たしつつあった米国と似た状況と言える。大規模な報道も，周辺のビジネスも，後戻りできない流れの中にあったという意味では1998年の日米両国は共通しており，それが薬物容認報道の一因になったとは説明できる。

シーズン本塁打記録を達成したマグワイアは日米野球には参加しなかったが，1998年12月から写真フィルムメーカー，コニカのコマーシャルに起用されると，ファストフード，菓子のＣＭにも出演[34]。2001年にイチローがマリナーズでデビューするまで，日本で大リーグ野手の顔となった。

(2) 一般社会の薬物容認

Hobermanは米国の一般社会で薬による能力増強が珍しくなくなったことが，筋肉増強剤容認につながったと主張した。注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）の治療に使われるリタリンなどが試験に臨む大学生に“スマートピル”として使われることや，勃起不全治療薬のバイアグラが中高年男性の娯楽に使われることを指摘し[35]，薬の使用目的が治療から「パフォーマンス向上」になったことを説明。特に1998年4月発売のバイアグラが与えた影響を強調している。

日本では1990年前後に栄養ドリンクブームがあった。「24時間，戦えますか」のキャッチコピーが流行し[36]，栄養剤の力で限界に挑むかのようなコマーシャルがもてはやされた。いわゆるバブル期の終わりとともにパフォーマンス向上を強調するコマーシャルは減った[37]。しかし米国でバイアグラが発売されると，薬物への関心は一気に高まった。当時の雑誌には，読者の興味にストレートに応えようとする特集が並んだ。

週刊ポストは「新薬最前線リポート」として「ハゲ薬・インポ薬」という扇情的な言葉を見出しに使い，育毛剤のプロペシアやバイアグラについて米国の事情をリポートしている[38]。This is 読売は勃起不全と育毛の新薬について「人類にとって，この上ない朗報」[39]とまで書き，女性誌のHanako[40]は「承認が待ち遠しい⁉　あのクスリ最前線情報」として厚生省の未承認薬である避妊用ピルやバイアグラについて報じた。

ビジネス誌の日経トレンディ[41]とDIME[42]は「生活改善薬」という言葉を使っている。英語のlifestyle drugの訳で，DIMEは「自分の精神的な苦痛や肉体的に不自由な面を改善してくれたりするという薬。灰色の人生をばら色にしてくれる薬なのだ」と説明している。パフォーマンス向上薬への期待がのぞく。

週刊ポストは11月，さらに踏み込んだ特集[43]を組んでいる。未承認薬を輸入して処方する東京都内の病院を取材し，うつ病治療薬のプロザックの効果を紹介。記事は「米国では特にうつ病でなくとも，ビジネス競争に勝ち抜くためにこの薬を服用する例も多く」とパフォーマンス向上のための使用を勧めるかのようである。女性自身[44]は未承認薬の個人輸入代行業者を取材し，催眠導入剤や大脳の働きを高めるとされるいわゆるスマートドラッグを取り上げている。

バイアグラの登場によってパフォーマンス向上薬が日本で認知されていく過程が，雑誌記事に表れている。Hobermanの主張を日本に適用するなら，筋肉増強剤の使用を容認する下地が日本にもあったということになる。

3-2　日本独自の背景

3-1では，米国の社会的背景が薬物容認に結び付いた図式が，日本にどのように当てはまるかを検討した。本項では日本独自の背景に言及する。端的に言うと，報道機関として判断を下すことはせず，他者に判断を委ねる形で薬物使用を伝えることの背景である。これは米国や西欧の報道を無批判に受け入れたり，都合よく引用したりする日本のジャーナリズム全般の問題につながる話であり，ここで全容を論じることはできない。

ただマグワイアの本塁打記録報道に関しては，顕著な点が二つある。筋肉増強剤の使用という逸脱行為の捉え方と，日本での大リーグの権威である。この2点について検討する。

(1)　逸脱自体が娯楽

日刊スポーツの写真（図1）やサンケイスポーツのイラスト（図2）には，筋肉増強剤が選手としての特長のように書き込まれている。アクションヒーローや怪獣を紹介する児童書のようだ。日本選手の薬物使用が賛否を呼んでいる状況だったとして，こういった扱いができるだろうか。筋肉増強剤の使用を無批判に記述する背景には，大リーグの本塁打記録を別世界のことと認識する姿勢が出ているのではないだろうか。写真やイラストに「アンドロステンジオン」と書き入れる無頓着さは，米国の本塁打記録を遠い世界の出来事と捉える無責任さであろう。

日本人にとってマグワイアの本塁打記録挑戦は，毎日目にするニュースであると同時に，海の向こうの遠い世界の出来事である。野手の日本選手が大リーグにいなかった1998年当時，筋肉増強剤を使って打ちまくる大リーガーは別世界の「怪物」だった。日本の新聞に再三登場する「怪物」という表現がメディアの意識の表れだろう。「怪物のような」ではなく，マグワイアという固有名詞の言いかえとして「怪物」が用いられる。

タイ記録となる61号本塁打を伝える読売新聞[45]は「<u>怪物</u>（以下下線は全て筆者による）マグワイアがルースを超え，マリスに並んだ」と書

き出し，「ハイペースで本塁打を量産する怪物は」「怪物は，少し目頭を熱くしたように見えた」と3度「怪物」という言葉を使っている。毎日新聞はともに共同通信配信記事で「怪物」の記事を1998年9月に2本掲載[46]している。

コークリーとドネリーは，運動選手が選手であることを過剰に追い求めた結果，社会から逸脱していく構造を論じた。集団内でしか通用しない決まり事や競技力向上のための薬物使用などの逸脱は，時代とともに規則が整備され，外の世界から批判されるようになった[47]と述べている。しかし，1998年の大リーグに関しては，筋肉増強剤を使って腕回り50センチの体を作り上げたマグワイアが本塁打を量産したことが歓迎された。コミッショナーが声明を出してアンドロステンジオンの使用を認め，ファンも熱狂した。逸脱しているがゆえに，常識外れのパワーが娯楽となったとみなすべきであろう。

日刊スポーツの「マグワイア　プロレス参戦か」という記事[48]は，プロレス団体のWCWがイベント出演交渉を始めたと伝えている。アンドロステンジオンを服用してつくり上げた195.5センチ，113.5キロの筋骨隆々の体に着目したというのだ。フリークショー（見世物小屋）を起源に持つ[49]と言われるプロレスが「怪物」マグワイアに結び付くのは，ファンが筋肉増強剤でつくった巨大な肉体という逸脱を楽しんだ証拠だろう。海の向こうの強打者の活躍は，異形の者が見せる怪力ショーでもあった。そういった楽しみは，なんの後ろめたさも伴わない形で日本のスポーツ紙に表出している。

(2) 大リーグの権威

Ⅱ，Ⅲに共通しているのは，日本の新聞社，出版社にある種の思考停止があり，米大リーグという権威に依存しているということではないだろうか。記事を支えるのは「大リーグでは・米国では」という枕詞であり，この言葉が本来あるべき論考を省略させてしまうほどの力を持っている。

日本のプロ野球は大リーグを追いかけ続けてきた。大日本東京野球倶楽部（現読売巨人軍）を1934年に結成した正力松太郎の遺訓の一つは「巨人軍はアメリカ野球に追いつき，そして追い越せ」[50]である。大日本東京野球倶楽部は同年の大リーグ選抜招聘という読売新聞社の販売促進イベントに合わせて創設したチームであり[51]，それが日本初のプロリーグの第一歩となったのだから当然である。

日本の競技スポーツは明治初期に文明開化の一環としてもたらされた[52]。「追いつき，追い越せ」という近代化への号令は，西洋化への号令と捉えられることがあった。西洋以上に西洋化することができない以上[53]，この号令は決して果たされないものであり，西洋は追い求める対象として残った。日本のスポーツは輸入から100年を経ても，欧州と米国という二つの想像の「中心からの距離によって測られる『遅れた日本』という，逆オリエンタリズムによるアイデンティティ」を持ち続けている[54]と，高橋徹はスポーツニュースを分析する中で述べている。

日本野球の歴史を振り返るとき，1934年のベーブ・ルースや，1949年のサンフランシスコ・シールズの来日など　米国野球との劇的な出会いが何度かあり，その都度「遅れた日本」が報道されてきた。例えばFittsは1934年のルース来日について雑誌「野球界」が，日本の打撃の弱さや送りバント偏重を批判的に論じたことを紹介。その中で興味深いエピソード[55]を記している。ルースはジョセフ・グルー大使との個人的会話で，期待していた犠打などの日本のチームプレーがあまり見られずにがっかりしたと話していたというのだ。日本の報道が，大リーグとの比較で日本野球の劣った点に注目したのに対し，ルースは異質な野球を期待していたのである。

パワー，特に打撃力で劣っているということは「遅れた日本」を語る際の主なテーマである。野茂の活躍によって投手が通用すると証明されると，「だが打者は通用しない」という形で非力な打者という「遅れた日本」のイメージは強化された。1990年代後半は，こうした時代であり，その際に「遅れた日本」の対極に置かれたものが，筋肉増強剤で極限まで大きくした打者の肉体で

あったのだろう。

1980年代は米国で確固たるシステムを構築したプロスポーツが，世界的に勢力を広げた時期である。1970年代に五輪憲章から「アマチュア」の語が削除され，1984年にはロサンゼルス五輪が歴史に残る商業的成功を収めた[56]。1988年のソウル五輪にはプロテニスのスター選手が出場。1990年代には英国を起源とするアマチュアスポーツの時代が終わり，アマの象徴だった五輪のプロ化が進んだ。日本で大リーグの権威を支えた要素には，合理的な米国のプロスポーツがビジネスなどの仕組みでスポーツ界の頂点にあると捉えられるようになった時流もあったことを付け加えておく。

おわりに

1998年，アスリートの筋肉増強剤使用という一般社会の常識から逸脱し，しかもほとんどの競技団体の規則にも抵触している事柄が，日本のマスメディアで容認された。マグワイアのシーズン本塁打記録への挑戦と記録達成の報道で起きた事象を振り返る中で分かったのは，報道機関が示す是と非の判断が，ボタン一つで簡単に変わるということである。

米国スポーツ史に残る大ニュースとなった本塁打記録挑戦は，8月にマグワイアの筋肉増強剤アンドロステンジオンの使用が発覚し，議論を巻き起こした。米国のマスメディアの薬物容認論は，その議論の中で批判に対抗してマグワイアを擁護する側から出た。

日本の報道も米国の議論の跡をたどったが，一方で議論抜きでの薬物容認記事も多く見られた。2019年に北米スポーツ史学会でマグワイア報道について発表[57]した際，日本の記事に表れたcasualness，無造作な容認が注目された。発表での質疑応答で呈された米国の先行研究との比較や日本の独自性についての疑問を再検討したものが，本稿の基となっている。

「大リーグで許されている」「米国で禁じられていない」という事実を持って日本の報道機関はある種の思考停止に陥った。これは欧米の報道を検証することなく受け入れたり，都合よく引用したりする日本のマスメディア全体に見られる傾向であり，日本ジャーナリズム史の中での大リーグの薬物報道の位置づけは，いずれ検討する必要がある。ただプロスポーツ，中でも野球は特に米国の大リーグの権威が強く，顕著な追随が見られ，ここで取り上げる意義があった。

日本で見られた筋肉増強剤使用への無造作な言及は，米国への無批判な追随の結果である。しかし無造作だったがゆえに米国のマスメディアが果たさなかった役割を担った一面もある。ウォディングトンとスミスは，本塁打記録達成を報じるサンフランシスコ・クロニクル紙にアンドロステンジオンへの言及がなかったことを指摘した[58]。快挙達成時に薬物問題はなかったかのように扱われたというのである。快挙を報じる日本のスポーツ紙に載ったマグワイアの略歴には，無造作に「アンドロステンジオン」と記されており，記録達成をたたえる記事を読んだ読者は，同時にそれが筋肉増強剤の助けを借りて達成されたものであることを意識させられるのであった。

専門記者に限らず多くの人が論じる対象になりやすいというスポーツの特性が表れたことも，今後の研究課題につながった。運動面で一貫して批判的な立場をとってきた朝日新聞が，1面のコラム「天声人語」で薬物使用に触れながらも偉業を絶賛するなど，スポーツ報道だからこそあぶり出された“素人”の本音があった。筋肉増強剤容認論が雑誌で歯切れよく述べられたのも，スポーツというくくりの中の問題だったからだろう。ルールによって限定された時間，空間で行われる競技スポーツという非日常を題材にするスポーツ報道の意味を考えることも必要である。

大リーグは2003年に禁止薬物を定め，2004年から罰則を導入。2013年からは世界反ドーピング機構（WADA）で生体情報を管理するなど五輪競技と同様の薬物への対応を始めた。この間，米国のマスメディアは1998年の報道を批判的に振り返る特集[59]を何度も組んだ。しかし日本のマスメディアは，罰則が導入されたという一点を

理由に，マグワイア礼賛を振り返ることなく，薬物疑惑のボンズらに厳しい目を向けるようになった。本稿がこれまでなかった批判的回顧や報道の総括の一因になればと，大リーグ報道に携わった一員として願う。

《注》

（1） 1998年に当時の大リーグ記録となるシーズン70本塁打を放った。アンドロステンジオン使用を同年に認め，アナボリックステロイドの摂取は引退後に認めた。通算583本塁打。殿堂入りしていない。（以下，大リーグの個人記録は全てbaseball-reference.comによる）

（2） John Hoberman, "McGwire's Secret," *IRON GAME HISTORY*（*Volume 5 Issue #3*）*Dec.* 1998.
John Hoberman, *TESTOSTERONE DREAMS – Rejuvenation, Aphrodisia, Doping,* University of California Press, 2005.

（3） Ivan Waddington and Andy Smith, *An Introduction to Drugs in Sports: Addicted to Winning?* Routledge, 2009. 邦訳アイヴァン・ウォディングトン，アンディ・スミス（大平章，麻生享志，大木富訳）『スポーツと薬物の社会学　現状とその歴史的背景』彩流社，2014年。

（4） Shaun Assael and Peter Keating, "Who Knew?" *ESPN The Magazine*, 21 Nov. 2005: 69–84.

（5） Bryan Curtis, "The Steroid Hunt: We know what MLB players were doing during the steroid era. Here's what baseball writers did," *GRANTLAND*, 8 Jan. 2014.

（6） Karl-Heinrich Bette and Uwe Schimank, *Doping im Hochleistungssport, Schrkamp* Verlag Frankfurt am Main, 1995. 邦訳カールハインリッヒ・ベッテ，ウヴェ・シマンク（木村真知子訳）『ドーピングの社会学　近代競技スポーツの臨界点』不昧堂，2001年。

（7） 拙稿「大リーグにおける薬物問題と米国スポーツジャーナリズム　野球殿堂投票のボンズ，クレメンス得票増の背景をめぐって」『江戸川大学紀要』第28号，2018年，pp. 179–192。

（8） 『共同通信』1998年1月14日。

（9） 『共同通信』1998年7月27日。

（10） Steve Wilstein, "Drug OK in Baseball, Not Olympics," *Associated Press*, 21 Aug. 1998.

（11） Hoberman（1998），前掲拙稿。

（12） 『毎日新聞』1998年7月28日付夕刊。

（13） Murray Chass, "Baseball Tries to Calm Down a Debate on Pills," *New York Times*, 27 Aug. 1998.

（14） 前掲『ドーピングの社会学』p. 125。

（15） Jean-Noel Missa, and Pascal Nouvelc, *PHILOSOPHIE DU DOPAGE*, Presses Universtitaires de France, 2011. 邦訳ジャン＝ノエル・ミサ，パスカル・ヌーヴェル（橋本一径訳）「ドーピング，向上医学，スポーツの未来」『ドーピングの哲学　タブー視からの脱却』新曜社，2017年，pp. 63–66。

（16） Hoberman（1998）

（17） Curtis, op.cit.

（18） 前掲『ドーピングの社会学』pp. 210–213。

（19） 前掲拙稿，p. 184。

（20） 同前，p. 186。

（21） 『共同通信』1998年12月31日。

（22） 『読売新聞』1998年12月24日付朝刊。

（23） 「日本でも連発　マック特番」『スポーツニッポン』1998年9月10日付。

（24） NHKオンライン番組表ヒストリーより（2019年8月23日閲覧）
〈https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/index.html〉

（25） Assael and Keating, op.cit., 74.

（26） 前掲拙稿，p. 188。

（27） 「マグワイア爆破予告　狙われた61発フィーバー」『日刊スポーツ』1998年9月8日付。
「63号マグワイアに金よこせ!!」『日刊スポーツ』1998年9月17日付。

（28） 「キリンジャイブ『ラソーダ編』」1995年9月23日より放送。キリン広報による。

（29） ロバート・ホワイティング／松井みどり訳『野茂英雄　日米の野球をどう変えたか』ＰＨＰ文庫，2011年，p. 113。

（30） AIU保険会社〈youtube.com/watch?v=gPOrOwDwlNI〉

（31） 『共同通信社』1998年9月9日。

（32） 『読売新聞』1998年9月2日付朝刊。

（33） 『読売新聞』1998年12月6日付朝刊。

（34） 「コニカカラー　センチュリア」1998，1999年。
「マクドナルド　ビッグマック」1999年。
「ハウス　とんがりCorn」2000年。

（35） Hoberman（2005），p. 209，212.

（36） 第一三共ヘルスケア公式サイト〈https://www.daiichisankyo-hc.co.jp/site_regain/〉

（37） 「春秋」『日経新聞』「春秋」2014年7月20日付朝刊。

（38） 「新薬最前線リポート第1回　飲む『ハゲ薬・インポ薬』の『驚異の効果』カルテ公開」『週刊ポスト』1998年8月15日号，pp. 245–247。

（39） みちおさむ「くすり歳時記『仮面の世界』に朗報」『This is 読売』1998年6月号，pp. 322–323。

（40） 「承認が待ち遠しい?!　あのクスリ最前線情報」『Hanako』1998年12月23日，p. 11。

（41） 「外資のクスリが日本占領？　ヒット商品が

続々上陸」『日経トレンディ』1998年12月号，pp. 49-54。
(42)「生活改善薬（ライフスタイル・ドラッグ）『もうインポ，ハゲ，デブなんて言わせない』“コンプレックス生活”を実現する薬」『DIME』1998年12月17日，p. 38。
(43)「がん，うつ病，ハゲ，そしてもちろんバイアグラも！『海外特効薬』を処方する病院が続々登場している」『週刊ポスト』1998年11月6日号，p. 228，229。
(44)「日本で買えないクスリの『実力度』！　バイアグラだけじゃなかった！」『女性自身』1998年9月29日号，pp. 151-153。
(45)「マグワイア61号本塁打　マリスにささげた一撃」『読売新聞』1998年9月8日付夕刊。
(46)「マグワイア58・59号本塁打　記録まであと2」『毎日新聞』1998年9月4日付朝刊。
「『怪物の振り』復活」『毎日新聞』1998年9月20日付朝刊。
(47) Jay Coakley and Peter Donnelly, *Sports in Society*, McGraw-Hill education, 2009. 邦訳J・コークリー，P・ドネリー（前田和司，大沼義彦，松村和則共編訳）『現代スポーツの社会学』南窓社，2013年，pp. 67-91。
(48)「マグワイア　プロレス参戦か」『日刊スポーツ』1998年9月16日。
(49) Michael R. Ball, *Professional Wrestling as Ritual Drama in American Popular Culture*, Edwin Mellen Press, 1990. 邦訳マイケル・R・ボール（江夏健一，山田奈緒子訳）『プロレス社会学 アメリカの大衆文化と儀礼ドラマ』同文舘，1993年，p. 65。
(50)『読売新聞八十年史』読売新聞社，1955年。
(51) 有山輝雄『甲子園野球と日本人　メディアのつくったイベント』吉川弘文館，1997年，p. 173。
(52) 中村敏雄『スポーツの風土　日英米比較スポーツ文化』大修館書店，1981年，pp. 193，194。
(53) 小坂井敏晶『異文化需要のパラドックス』朝日選書，2016年，p. 185。
(54) 高橋徹「スポーツとニュース　その接続の凡庸さの中に」伊藤守編『テレビニュースの社会学 マルチモダリティ分析の実践』世界思想社，2006年，p. 117。
(55) Robert K. Fitts, *BANZAI BABE RUTH: Baseball, Espionage, & Assassination, During the 1934 Tour of Japan*, University of Nebraska Press, 2012, 162.
(56) Peter Ueberroth, *MADE IN AMERICA - His Own Story*, Deborah Rogers Ltd, 1985. 邦訳ピーター・ユベロス（竹村健一訳）『ユベロス　明日を拓くわが起業家魂！』講談社，1986年。
(57) The McGwire Exception: Japan's Acceptance of Performance Enhancing Drugs in Mass Media Coverage of the 1998 Major League Baseball Season（47th Annual Convention of the North American Society for Sports History）
(58) 前掲『スポーツと薬物の社会学』pp. 23-26。
(59) Assael and Keating, op.cit., 69-84.
Curtis, op. cit.